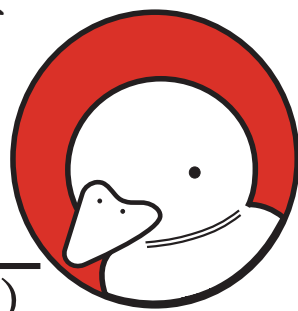


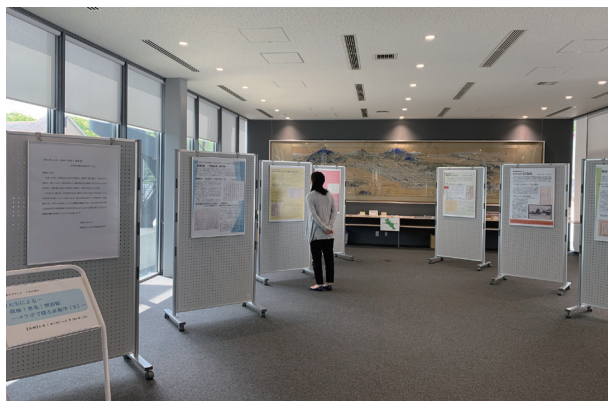
れきしんぶん

2020年夏号（第6号）



学生が歴彩館史料に立ち向かう！ パネル展示 参加者インタビュー

5月25日～6月30日の間、歴彩館1F京都学ラウンジで、パネル展示「府大生による…探検！発見！歴彩館 コラボで探る京都学(2)」が開催されました。今回は展示パネルの作成者、歴史学科3回生4名（正瑞さん、前田さん、原田さん、三角さん）にインタビューを行い、当企画の裏話や作成秘話を伺いました。



▲歴彩館1F 京都学ラウンジ

「お寺がきれいなのは誰のおかげ？」（正瑞さん）

歴彩館所蔵の国宝・東寺百合文書を用いて、東寺の周囲に住んでいた、寺に従う低い身分の人々と東寺の関わりについて解説。

「卒論で中世の身分制について扱う予定なので、せっかくなら歴彩館所蔵の国宝・東寺百合文書を使おうと思い、この話題に決めました。一番基礎的ですが、今なら彼らが被差別身分だという研究成果があるものの、一から史料に当たる時にはそのような色眼鏡で見えてはいけないというのが反省点です。」

「東山科ってどこ？」（原田さん）

山科音羽村関係文書と京都府行政文書を用いて、やましなごうし山科郷土が現在の千葉市に「東山科」の名を残すに至った歴史について解説。

「僕は支配身分に従う中間層をやりたいと思って、特に歴彩館に山科郷土の史料が多かったのが、これにしました。先生からの指摘を受けて途中で方向転換をしたのがめっちゃ大変でした。あとはパネル自体、簡潔に分かりやすく作るのも難しかったですね。」

「生命をつなぐ乳」（前田さん）

鴨脚家文書と近江屋吉左衛門家文書を用いて、江戸時代の乳幼児の育児に関して解説。

「近世の火事関係の史料を探す中で、火事で親を亡くした子の史料があり、それが面白かったからこのテーマにしました。先に文献等を読んで背景知識をつけてから原文書の調査に当たり、展示にも使っている史料を先生に見てもらった時に、『こんなあるんやあ』と言ってもらって、『やってやった！』と思いました。文書に触れたくて始めたので、いい経験になりました。」

ちほうきょうせん 「大正大礼・地方饗饌」（三角さん）

京都府行政文書を用いて、京都府で開かれた大正天皇即位の祝賀行事「地方饗饌」について解説。

「大正天皇即位に関する行政文書の中に『地方饗饌』が出てきて。実際に儀式を行っている東京・京都などだけでなく、日本中、田舎でも今の日本じゃない台湾・朝鮮でも即位を祝っていた、というのに興味を持ちました。もともと天皇・皇室と民衆の関わりに興味があって、今回は文化を掘り下げたので、他の分野も見てみたいと思うようになりました。」

学生が展示に関わる企画は府大ならではのあり、4名それぞれが工夫を凝らして作ったパネルは見応え十分でした。この企画の続編「府大生による…探検！発見！歴彩館 コラボで探る京都学(3)」が10月1日～11月1日の間、今回と同じ京都学ラウンジにて開催予定です。現在歴史学科2回生の有志が展示に向け準備中です。歴彩館にお越しの際は、ぜひ足をお運びください。（長谷川・小島）

歴史の眼で コロナ禍を見る

刻一刻と変化する「コロナ禍」。20 世紀初頭に流行したスペイン風邪との共通点はあるのでしょうか。また、私たちはこのような現実の問題に対してどのように向き合えば良いのでしょうか。西洋近代史を専攻する川分圭子先生にインタビューを行いました。（青柳・浅見・島田・西島）



◀ 川分圭子先生

——インターネットや新聞記事・ニュース番組では、新型コロナウイルス感染症の流行についておよそ 100 年前のスペイン風邪の流行と重ねる向きがあるように思います。先生はスペイン風邪と新型コロナウイルス感染症の共通点について何かご意見はあるのでしょうか？

この二つを比較すること自体ちょっと難しいと思っています。スペイン風邪が第一次世界大戦の最中で、軍事活動に特有な密室状態があるので、それと平和な社会との比較はなかなか難しいという気がしますね。だから比較はできないというのが残念ながら私の答えで。それよりは例えばスペイン風邪を起点にしてその後どのくらいの頻度でインフルエンザが流行したかを取り上げてみて、20 世紀の感染症の流行の歴史を辿ってみてものを考えてみるというのもいい気がします。20 世紀に起こってくる世界人口の増加とか人の移動と合わせて、感染症の流行を見ることによって「ああ、我々の抱えてる問題はこうなんだ」ということが言えるんじゃないかと思っているんですね。

——歴史学を学ぶ人間としては、今コロナ禍をどういう風に
見ていくべきでしょうか？

今私は、砂糖の生産と貿易が世界中に広がっていく過程を辿って、19 世紀と 20 世紀を通して見るという研究をやっていますが、そうすると、インフルエンザや疫病で 19 世紀と 20 世紀を通して見てみなさいと言われたら、それはそれでできる気もします。つまりその時期に起きている事件が一緒なので、砂糖の代わりに感染症というトピックで同じ時代を見ることも出来ないことはないかなと思っているんですね。ある時代の事件史とその解釈が頭に入っている、そこが歴史家の強みだと思います。ただ歴史は長い目で見ないとやっぱり歴史にならないです。

今回のインタビュー前にスペイン風邪についての本を探してみても思ったのは、こういう本を書いているのは皆、歴史家なんですよ。他の学問は現在についてばかりやっていて、全然それぞれの分野の過去を振り返らなくなっている。しかし人は必ず「昔起こったあれって、どういう事情だったのかな」と解釈を求めてきますが、やっぱりこういう昔についての答えを考えるのは我々しかいない。結局、歴史学は現実の問題に対処する学問ではないので、歴史家がすべきことは、歴史的な長い時間枠においてみるとどんな現象になるのかということを考えることだと思います。例えば、100 年とか 200 年という時間軸の中でこれを置いたときどう見えるかという話を、やらないといけない。皆さんも卒論とかでは短い時間しか扱わないかもしれないけど、やっぱりせめて 150 年くらいの視点を持って物事を見るということが歴史においては重要だと思います。

——インタビューありがとうございました。

編集後記

れきしんぶん夏号、お楽しみいただけたでしょうか。1 面はボスター発表の裏側について、2 面には歴史的観点で「コロナ禍」を見るという企画をご用意しました。こうして長い目で社会に起こる現象を見る、というのも面白いですね。歴史学科らしい記事をお届けできていれば幸いです。ご協力くださったすべての皆様、そしてお読みくださった皆様に感謝申し上げます。（薄）



FOLLOW ME...
[@designkenshu](https://twitter.com/designkenshu)

作成：京都府立大学文学部歴史学科文化遺産デザイン研修
発行：606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5
京都府立大学文学部歴史学科